〔PBLの風と土　第24回〕

よりよい地域のために大学は地域と共に

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、連載5年目には米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題しています。

1. 問題解決の掛け声は無限ループ？

「課題解決型のボランティアはなかなか続かない。」先日、ある会議の席で、委員の1人から、そんな発言が出た。この発言には続きがある。「解決すべき課題を考えて行動することは大事」と前置きした上で、「楽しみながら活動して、結果として課題が解決していた」という形もあること、そして発言者の携わる現場での経験をもとにすれば、その方が望ましい、という感想と意見が示された。

コロナ禍も一定の収束を見せ、対面での取り組みの比率が高まる中、1月23日に久留米大学の地域連携センター・久留米大学基盤教育研究センターの主催による研修会で「サービスラーニングの教育手法とその展望」と題し話題提供をさせていただく機会を得た。コロナ禍を経て、改めてキャンパスに整備された地域連携のための教育・研究・社会貢献の拠点を活かしていく契機に、という期待のもとでの企画だった。当日の様子は早々に久留米大学のホームページで公開されているので、そちらに譲るとして、終了直後に地域連携型の科目を担当する教員から寄せられた「プロジェクト型の科目は、どう始め、続け、終えられるのか」という個別質問を紹介しておきたい。というのも、今回の冒頭で紹介した「課題解決型のボランティアは続かない」という現場から寄せられた素朴な思いと深く関連するためである。

久留米大学での講演でも、前回の連載でも、本連載で何度も取り上げているSOFARモデルを紹介した。簡単に言えば、大学の地域貢献活動を組み込んだ学習プログラムにおいて、学生(Students)・地域団体(Organizations)・教員(Faculty)・大学の執行部や事務局(Administrators)・地域住民(Residents)の人間関係が良好にあるよう、対人関係をうまく調整しよう、という観点である。言うまでもなく、対人関係をうまく調整するということは、地域に根ざす課題や、そうした課題をもとにした具体的な問題を解決するための手段でこそあれ、それが主要な目的にはならない。加えて、地域内の人間関係を無視して学生や大学側が自己完結した取り組みを行ったとしても、地域が抱える問題は解決せず、課題はむしろ膠着化することさえ想定できる。

そこで今回は、前回の結語でも述べたとおり、大学と地域との連携・協力において変容的な関係構築を図るための自己点検評価ツール「TRES（Transformational Relationship Evaluation Scale：変容的関係評価尺度）」[1]のの改良版「TRES2」（Kniffin et al. 2020）を紹介する。Kniffinら(2020)は「TRES2はTRES1に引きつづき、関係性の現状と望ましい状況の両方についての認識を求めるもの（As with TRES I, TRES II invites perceptions of both current and desired status of relationship characteristics）」（p.9）と述べていることから、点検・評価の過程で、自ずと教育実践を展開する現場のよりよい姿を展望することになることが暗示されている。一方、前回紹介したとおり、TRES1では4つのセクションからなる緻密な点検・評価の枠組みでもあり、SOFARのパートナーシップの

検討する上では、自己評価に一定の時間と労力を必要とする。冒頭に紹介した、よりよい地域社会のために「解決をめざすと続かない」という現場の声と、地域社会と共に「何をめざして取り組むのか」という大学の声、それら両者に対する1つ応答として、TRES2の紹介により、TRES1も含めた大学と地域とのよりよい関係構築のあり方を探る手がかりを整理してみたい。

2. TRESの理論的・方法論的背景

TRESがSOFARモデルと深い関係にあることは、前回の本連載第23回で「SOFARのフレームワークに含まれるすべての構成員が使用できる単独の調査票を開発」したClaytonら(2010)の論文を解題したことで、一定の理解はいただけることだろう。ただ、Kniffinら(2020)の論文では、より明快にBringleら(2009)の論文が「サービス・ラーニングや地域貢献の研究全般に3つの貢献がなされた（three contributions to the study of SLCE relationships in general）」ものとして、その意義をまとめている。順に、(1)関係性と関係構築とを区別したこと（distinguishing Between Relationships and Partnerships）（p.4）、(2)利害関係者・構成員の差異化を図ったこと（differentiating the Stakeholders/Constituents）（p.5）、(3)関係性と関係構築に関して明快なパラダイムを拡張して適用したこと（expanded on and operationalized the relationship paradigms）（p.6）である。これら3点について、順に見ていくことにしよう。

まず、関係性とパートナーシップの区別については、第19回で紹介した「関係の連続性(Relationships continuum)」の図に象徴されるように、大学—地域間の関係性（つまり、関係の有無ではなく個々の関係の特性）について、親密性・公平性・誠実性の3つの特徴が見られるときに望ましいパートナーシップ（つまり、関係構築）がもたらされている、と示したことが挙げられる。また、そうした関係性は一時のものではなく「共通の目標達成に向けて地域資源の結合のもとで共通活動に従事する個人・グループ・組織からなる構造化された存続的な関わり」のもとで構築されているもの、と捉えている。筆者が時折用いる比喩表現としては、「瞬間最大風速」や「底力」といった非日常や無理をした場合ではなく、「平年並みの気候」あるいは「実力」といった具合に普段の日頃の振る舞いがどのような状態かに関心が向けられる。これらの点を踏まえ、Kniffinら(2020)では「関係の連続性」を簡略化して「関係性の型の性向（The Nature of Types of Relationships）」として提示している。[2]

続いて、関係性とパートナーシップにおける

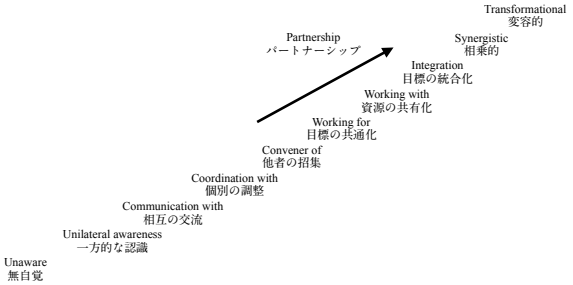

図2：関係性の型の性向（Kriffin, 2020, p.4、筆者訳）

利害関係者/構成員の差異化は、言うまでも無くSOFARの5つに分解したことを指している。なぜなら、大学と地域との連携は、構成員の複雑さや多様性のもとで行われているため、「大学」と「地域」と一括りにしてしまっては単純すぎ（too simplistic）で、そもそも両者とも一枚岩（monolithic）ではない。そして、かねてよりサービス・ラーニングの教育実践における対人関係への関心（Bringle & Hatcher,2002）をもとに、SOFARモデルを提示した[3]。なお、Kriffinら(2020)の論文では、Bringleら(2009)では図4として示された「SOFARの5つの構成員の詳述（Elaboration of Five Constituencies）」（p.16）を、構成員内・構成員間で相互作用がある動態を追記した上で「SOFARモデルの拡張（Extension of the SOFAR Model）」（p.6）として再提示している。

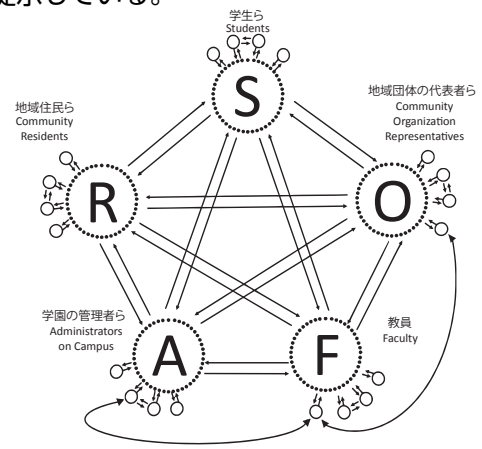

図3：SOFARモデル拡張版（Kriffin, 2020, p.6、筆者訳）

そして3点目の関係性とパートナーシップの新たな理論的枠組みが「搾取的—交流的—変容的からなるE-T-T連続体（E-T-T continuum: Exploitative—Transactional—Transformational）」（Kriffin, 2020, p.6）である。これはEnosとMorton(2003)が示したサービス・ラーニングにおけるパートナーシップを短期的かつ特定の活動に関わるクローズエンドな「交流的（transaction）」なものと長期的かつ既成の規範に疑問をもち社会システムに変化をもたらすオープンエンドな「変容的（transformational）」の2種類に、「搾取的（exploit）」という状態を追加したものである[4]。そもそもサービス・ラーニングでは、よりよい地域社会をもたらす活動の維持・発展に大学が貢献するという教育・学習プログラムが展開されることもあって、理論的というよりも理念的な観点から、当事者間での功利的・戦略的な関係構築がそぐわないことは容易に想像がつくだろう。実際、Kriffin(2020)では「搾取的関係」とは大学との地域の連携が「最終的に負の結果をもたらす（net negative outcomes）」(p.6)「または抑圧的な要素を含む（or as including oppressive elements）」（p.7）もので「それらがないと理論的枠組みが不完全なものになる（the framework incomplete without them）」（p.7）という実体験から連続体へ追加されたと記されている。

3. TRES1とTRES2の共通点と相違点

こうしてサービス・ラーニングのパートナーシップにおいて、SOFARに象徴される5つの構成員間・構成員内において適切な関係構築がもたらされ、それが搾取的なものにならずに交流的なものから変容的なものへと発展することの意義が確認できた上で、実際の現場の特徴を検討できるようにしたのがTRESの略称で呼ばれる指標である。前回、第23回で示したとおり、9つの領域に対して「現状」と「理想」の両方を自己点検・評価するための設問が示された。また、文章で記述された選択式の質問に回答するだけでなく、自由記述やベン図から大学と地域の2者関係を選択するという手順も組み込まれた。なお、第23回ではClayton(2010）では(a)質問票を用いた60-90分の対面インタビュー(n=15)と(b)同じ質問票を回答者が個別に記入(n=5)する2形態により、計20名から各々2団体の実践についてのデータ収集が行われたこと、また文章からの選択式の回答とベン図での選択式の質問の回答とのあいだで、両者の結果には高い相関があることを紹介したが、t検定により心理学的な検証がなされている。その際、TRESの9分野の各質問への回答を5段階の得点に変換して大学と地域とのパートナーシップの有り様をE-T-T連続体では現状と理想がいずれに該当するかの度数を求めたところ、双方向で変容的な関係がもたらされることを望む傾向が見られたこと（以下、表1）、「人間関係の相互依存性理論（interdependency theory of relationships）」をもとに、大学と地域の親密性について、活動の頻度・活動の多様性・パートナー側からの相互依存性・大学側からの相互依存性の4つの指標（以下、表2）も特定された[5]。

表1：5段階の得点に変換し捉えた大学-地域間の関係性（Clayton et al., 2010, p.13）

TRESの概念スコアに基づいた搾取的、交流的、変容的と記述される関係性の度数
(Frequencies of Relationships Described as Exploitative, Transactional, or Transformational, Based on TRES Conceptual Scores)

頻繁な相互作用 (Type of Relationship)	度数 (Frequency): 現状の関係性 (Current Relationship)	度数 (Frequency): 理想の関係性 (Desired Relationship)
一方か双方が搾取的 (Exploitative for one or both) (TRES < 1.5)	0	0
一方のみが交流的 (Transactional for only one) (1.51<TRES<2.5)	3	0
双方が交流的 (Transactional for both) (2.51<TRES<3.5)	8	6
一方のみが変容的 (Transformational for only one) (3.51<TRES<4.5)	17	8
双方が変容的 (Transformational for both) (4.51< TRES<5.0)	9	24

注：関係性を調査した全数N=40から若干のデータが欠損 (Some data missing from total of N=40 relationship studied)

表2：人間関係の相互依存性理論に基づいた親密性の4指標（Clayton et al., 2010, p.13）

親密性の指標に対するTRESの評価 (TRES Ratings for Indicators of Closeness)

測定 (Mesurement)	TRES *M*	TRES *M*
頻繁な相互作用(Frequent interactions)	あり (Yes) =4.71	なし (No) =3.62 **
多様な相互作用(Diverse interactions)	多い (Many) =4.81	1か2 (One or two) =3.97 **
受入団体の意思決定に大学側が貢献 (Respondent contributed to community partner's decisions)	実例多数 (Many Examples) =4.76	実例少数 (Few Examples) =3.87 **
受入団体が大学側の意思決定に貢献 (Community partner contributed to respondent's decisions)	実例多数 (Many Examples) =4.70	実例少数 (Few Examples) =3.86 **

注：TRESの概念的範囲 (TRES conceptual range)：1=一方あるいは双方が搾取的 (exploitative for one or both)、5=相互に変容的 (mutually transformative)
** $p < .05$

Kriffinら(2020)によれば、TRES1は関係性とパートナーシップの「発展的探究の小宇宙（A Microcosm of Evolving Inquiry）」（p.7）として、緻密に設計・使用・検定されたものの、「あまりに時間がかかりすぎ複雑（too time-consuming and complex）」（p.9）なものとなってしまった。そこで、当初は2010年の出版予定だったとのことで、先行して簡略版を検討し、それがTRES2として改良されることになったという[6]。TRES1では心理学的な検証のために対人関係の古典的な理論を参照されたが、TRES2ではより高次なネットワーク（apply to higher levels of networks）にも対象が広げられた。ちょうど、図3でのSOFARモデル拡張版にある、複数パートナー・組織間も射程内と捉えられる。

表3-1：TRES1（Clayton et al., 2010, pp.9-10）

変容的関係評価尺度　Transformational Relationship Evaluation Scale (TRES)

パートナーシップの分析

あなたの視点から見てパートナーシップの実際の特徴を最もよく表している**選択肢に×印を**
（現在のパートナーシップであれば現在の状態、以前のパートナーシップであれば開講時の状態）

あなたの考えるパートナーシップの望ましいあり方を最もよく表している**選択肢に○印を**
（×を付けた選択肢と同じ場合もあれば、異なる場合もあることに注意）

1. サービス・ラーニング（SL）におけるパートナーシップでの成果
   a. _____ このパートナーシップでは、私たち双方に恩恵よりも負担が多くかかる。#
   b. _____ どちらかが恩恵を受けるが、もう一方に負担を強いている。#
   c. _____ このパートナーシップによって、どちらも大きな恩恵を受けないが、どちらも大きな負担を被らない。#
   d. _____ どちらかが他方よりも大きな恩恵を受けるが、どちらかが大きな負担を被ることはない。##
   e. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）このパートナーシップによって等しく恩恵を受ける。*
   f. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を受け、どちらかがパートナーシップを通して発展する。**
   g. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を受け、双方がパートナーシップによって発展する。
   h. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を受け、双方が成長し、関係そのものが発展する。
   i. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を得て、双方が成長し、関係そのものが発展し、お互いが属するシステム（例えば、組織など）がパートナーシップによって、より発展しやすくなる。

2. SLにおけるパートナーシップでの共通の目標：あなたとあなたの地域パートナーは、SLでの協働において、どの程度の共通の目標を持っている／いない、持っていた／いなかった、と捉えている？
   a. _____ 概ね私たちの目標は対立している #
   b. _____ 対立はしていないものの、概ね私たちの目標は筋が通っていない。*
   c. _____ 私たちの目標は、いくつかの点で1つにまとまっている。*
   d. _____ 私たちは共通の目標を持っている

3. 意思決定：SLの活動について決定する際、あなたとあなたの地域パートナーとのあいだでどの程度協働した？
   a. _____ このプロジェクトに関する決定は、他のパートナーを考慮することなく、単独で行われる。#
   b. _____ このプロジェクトに関する決定は、単独だが、他のパートナーをある程度考慮し行われる。##
   c. _____ このプロジェクトに関する決定は、単独で行われ、他のパートナーに相当の配慮がなされている*。
   d. _____ このプロジェクトに関する決定は、他のパートナーと協議して行われる。*
   e. _____ このプロジェクトに関する決定は、協働的に行われ、概ねどちらかの関心によって主導されている。**
   f. _____ このプロジェクトに関する決定は、協働的に行われ、概ね共有されたの目標への共通のコミットメントを反映した合意形成のプロセスに至る。

4. 資源：このSLでのパートナーシップにおいて
   a. _____ 私たちのうちの一方は、その活動に必要な資源のほとんど、あるいはすべてを提供し、もう一方はほとんど、あるいはまったく提供しない。#
   b. _____ 私たちのうち、一方が他方より多くの資源を提供し、もう一方はいくらか資源を提供している。*
   c. _____ 両者とも多大な資源を提供している。

5. 対立管理：このSLでのパートナーシップの活動に関して対立が生じる場合（あるいは生じた時）
   a. _____ 私たちの双方が、その対立に対処することを積極的に避けるだろう。##
   b. _____ 私たちのうち一方は対立に対処しようとし、もう一方はそれを避けるだろう。##
   c. _____ 私たち双方はその対立に対処するだろうが、それは私たちにとって不快なことだろう。*
   d. _____ 私たち双方は、問題を解決するという共通の期待を持って、対立に公然と対処するだろう。

6. 活動とアイデンティティ形成におけるこのパートナーシップの役割：このSLパートナーシップにおいて
   a. _____ 私たち双方とも、全体的に活動に支障をきたしてきた。#
   b. _____ 私たちのどちらかが、全般的に活動を支障をきたしてきた。#
   c. _____ 私たちのどちらかが活動の役に立ったが、もう一方の活動には何の影響も与えていない。##
   d. _____ 双方の仕事を助けた。*
   e. _____ 双方が活動を助け、どちらか一方の「自分らしさ」の定義に役立ったが、一方に留まった。**
   f. _____ 双方が活動を助け、双方にとっての「自分らしさ」の定義に役立った。
   g. _____ 双方が活動を助け、双方にとっての「自分らしさ」を定義に役立ち、私たちのうちの一方が活動を通じて重要な貢献をする能力を高めた。
   h. _____ 私たち双方が活動を助け、私たち双方に「自分らしさ」を定義するに役立ち、私たち双方が仕事を通じて重要な貢献をする能力を高めた。

7. 力関係：このSLパートナーシップにおいて
   a. _____ 一方がほぼ、すべての力を発揮し、もう一方はほぼ、まったく力を発揮しない。#
   b. _____ どちらかが多少なりとも力を発揮している。*
   c. _____ このパートナーシップでは平等に役割が共有されている。

8. このSLでのパートナーシップにおける重点事項
   a. _____ 私たちのあいだではお互いにとって重要なことは何もない。#
   b. _____ 私たちのこの関係から各々が得るものが重要である。##
   c. _____ 私たちのこの関係から双方が得るものが重要である。*
   d. _____ 私たち双方が何を得るか、そしてどちらかがどの程度成長するかが重要である。 **
   e. _____ 私たち双方が何を得て、互いにどこまで成長できるかが重要である。
   f. _____ 私たち双方が得るもの、成長する度合い、そして互いの環境での成長を育むパートナーシップの力量が重要である。

9. 満足度とよりよい変化：パートナーシップの成果として
   a. _____ 双方とも不満があり、双方とも悪い方向に変化している。#
   b. _____ 双方とも不満があり、どちらかが悪い方に変化した。#
   c. _____ 双方とも不満だが、どちらも悪い方に変化していない。#
   d. _____ どちらか一方だけが不満で、どちらも悪い方に変化していない。##
   e. _____ 双方とも満足しており、どちらも良い方向にも悪い方向にも変化していない。*
   f. _____ 双方とも満足し、どちらかが良い方に変化した。**
   g. _____ 双方とも満足し、両者とも良い方向に変化している。
   h. _____ 双方が満足し、より良い方向に変化し、関係そのものもより良い方向に変化している。
   i. _____ 双方が満足し、より良い方向に変化し、関係そのものもより良い方向に変化し、周りの世界もより良い方向に変化している

注：TRESの生データは、選択肢aを1点、選択肢bを2点として、各項目の得点を合計し、回答選択肢の数で割って平均値を算出されたものである。
TRESの概念的データとして、上記の#は少なくとも一方にとって押取的と示された項目には「1」のスコア、##は一方にとって有益だが双方とって有益ではない項目には「2」のスコア、*は双方にとって有益なので相互に交流的となる項目には「3」のスコア、**は両方にとって有益で一方にとって変容的な項目には「4」のスコア、上記の表の空欄=相互に変容的な項目には「5」のスコア、それぞれを与えて計算される。

表3-2：TRES2（Kriffin et al., 2020, pp.10-11）

TRES II の領域と項目

説明書：以下の調査は、地域社会と大学のパートナーシップに焦点を当てたものです。正解も不正解もありません。パートナーシップに関するご自身の通常の印象をお示しいただきたく、そのパートナーシップにおけるご自身の経験を最もよく表す選択肢を1つだけ選んでください。ご自身の視点から見たパートナーシップの実際の特質を最もよく表している選択肢には「X」印を付けてください。ご自身がお考えのパートナーシップの望ましいあり方を最もよく表している選択肢には「*」を付けてください（望ましいあり方が実際と同じ場合は、選択肢の横に「X*」を付けてください）。

1. 目標 *(Goals)*：
   a. 一部のパートナーの目標が不明で、それが妨げとなって、不都合が生じている。
   b. 一部のパートナーの目標だけに基づいて行動しているものの、誰にも不都合が生じない。
   c. パートナーシップには全パートナーの明確な目標が重要で、パートナーシップで育まれる。
   d. 私たちは（「うちの」や「皆さんの」といった個々の目標ではなく）「我々の」目標だと言えるような、共通で統合された発展的な目標を共有している。

2. 対立 *(Conflict)*：
   a. 対立が認識されないまま、あるいは回避されることで、パートナーに不都合が生じる。
   b. 対立が認識され、根本的な争点は未解決なものの部分的には対応されており、パートナーやパートナーシップには不都合が生じていない。
   c. 対立がパートナーによって首尾良く解決されている。
   d. パートナーシップの新たな可能性を生み出すきっかけとして、パートナーが対立を受け入れている。

3. 意思決定 *(Decision-making)*：
   a. パートナーの中には、全体を巻き込まない形で意思決定を行い、その意思決定が少なくとも一者を不利な立場にもたらすものがある。
   b. 単独ではあるものの、他のパートナーに配慮して意思決定が行われている。
   c. パートナーらは、全体が納得する方法で意思決定を行い、その決定が私たち個々のパートナーに役立つものとなっている。
   d. パートナーらは、可能な選択肢を慎重に検討し、どう決定するかを共に確認し、その決定は、個々のパートナーだけでなく、パートナーシップにも恩恵をもたらす。

4. 資源（重要な物品、時間、経験、資金など）*(Resources[e.g.,material goods, time, expertise, money])*：
   a. 一部のパートナーが他のパートナーから資源を奪う状態、かつ/あるいは、お互いに提供することが適切か検討されていない状態で、その結果、一部のパートナーに不都合が生じている。
   b. 一部のパートナーは、提供する資源を持たないと思われている他のパートナーに、またはそのパートナーの代わりに資源を提供している。
   c. パートナーらは、互いの恩恵のために手持ちの資源を交換している。
   d. 資源をつぎ込むことは公平なことであって（たとえ不平等であっても、それぞれが提供するものは我々が選んだ方法として釣り合うもので）、新たな資源が生み出されており、資源は（「うちの」「みなさんの」ではなく）共通のものだと理解されている

5. 各パートナーの活動におけるこのパートナーシップの役割 *(Role of this partnership in each partner's work)*：
   a. パートナーシップに参加することで、一部のパートナーが活動に支障をきたしている。
   b. 他のパートナーの貢献を通して、一部のパートナーは独特な活動に発展がもたらされている。
   c. 他のパートナーの貢献を通して、全てのパートナーが独特な活動に発展がもたらされている。
   d. パートナーらは、私たちが「我々の」活動とみなすことのできる活動を共創し、その活動を理解し実行するための個別的・集合的な能力が高められている。

6. 自己認識におけるこのパートナーシップの役割(自信、主体性、発言力など)
   (Role of this partnership in sense of self [for example, confidence, agency, voice])：
   a. パートナーシップに参加して、パートナーの一者あるいは複数の自己認識がぐらついている。
   b. 他のパートナーの貢献を通じて、このパートナーシップは、あるパートナーの独特な自己認識への一助となっている。
   c. 他のパートナーの貢献を通じて、全てのパートナーの独特な自己認識が強められている。
   d. 全てのパートナーの自己認識は、（パートナーシップのメンバーとして）連帯感が発展するにつれて深められている。

7. 相互作用の範囲と特質 *(Extent and nature of interactions)*：
   a. 一部の者にとって、パートナー間での相互作用は否定的に捉えられている。
   b. 一部は相互作用の範囲と特質を抑えているものの、パートナーらはその意図に肯定的である。
   c. 相互作用の範囲は、全てのパートナーの発言によって決定されている。
   d. パートナーらが企図する多様で頻繁な相互作用は、私たちの誰もが自分自身で実施しうる物事を超越したものとなり、パートナー（およびパートナーシップ）の成長の支えとなっている。

8. 力関係（別の言い方をすれば、影響力を及ぼす能力）*(Power [in other words, the ability to have influence])*：
   a. 一部のパートナーは、他のパートナーが能力を発揮していることによって、自身の能力が認識できていない。
   b. 一部のパートナーは、他者が示す（一部の）パートナーの恩恵のために自身の能力を発揮している。
   c. 全てのパートナーの能力が束ねられ、全員が力関係が分配される上での公平性を高める権限を持っている。
   d. 全てのパートナーが能力を結集させ、私たちが一人ひとりでも、パートナーシップとしても、能力を発揮する新たな源泉や活用する方法を生み出している。

9. 成果 *(Outcomes)*
   a. このパートナーシップは一部のパートナーに重要な成果をむしばんでいる。
   b. このパートナーシップは（全てではないが）一部のパートナーに重要な成果を個別にもたらしている。
   c. このパートナーシップは全てのパートナーに重要な成果を得る機会を与えている。
   d. このパートナーシップは、個別的かつ集合的な成長を育みながら、全員に個別的にも共同的にも意義のある成果を与えている。

10. 満足度 *(Satisfaction)*
   a. 私たちの大半は、このパートナーシップに不満を抱いている。
   b. 大半はこのパートナーシップに満足しているものの、不満を抱いている者もいる。
   c. 全員がこのパートナーシップに満足している。
   d. 私たちの大半もしくは全員がこのパートナーシップに満足しており、当初の期待以上である。

注：Clayton et al. (2009)を修正（*Note*. Modified from Clayton et al. (2009)）

表3-1と表3-2とを比較してみれば、TRES1とTRES2の共通点と相違点に気づくだろう。まず、共通点は関係性の現状と理想像の双方について回答を求めていることが挙げられる。一方、相違点についてはTRES1が9つの領域ごとに必要な選択肢が検討された上で示されているのに対し、TRES2は10の領域に全て4つの選択肢を提示する構成とされている。また、各領域のラベルについても、TRES1は質問紙調査として質問文の文体が取られているのに対し、TRES2では各領域を端的に表す単語のみで表現されており、回答者がより直感的にサービス・ラーニングの実践を振り返りながら現状と理想像に思いを巡らせることができるようにしたと想像できる。

今回はTRES1とTRES2の項目の相互比較のみに留め、Kriffinら(2020)で示されている使用結果については次回にて取り上げる。なぜなら、その相互比較表（Kriffin et al., 2020, pp.12-14）では、(1)調査票の使用例（誰が何のため

に回答したか）、(2)使用対象（SOFARのどの関係性について検討したか）、(3)位置づけ（実践の振り返り・研究・診断的評価、これらの複合など）、(4)目的（関係構築、知見の導出、ツール開発、ツールの改良、ツールの普及、プログラム能力開発、プログラム能力向上）、(5)詳細と意義、これらについて、TRES1では3事例、TRES2では6事例を紹介している。これらにより「心理学的に検証された尺度ではない（not yet a psychometrically validated scale）」ものの、「E-T-T連続体上の関係領域の代表的かつ適切なサンプルを有している（adequate sample of relationship domains on the E-T-T continuum)」こともあって、「内容的妥当性がある（has a representative）」と記したと受け止められる（Kriffin et al., 2020, p.9）。

4. 共通認識のもとでの集団意思決定へ

以上、今回は前回紹介したClaytonら(2010)による報告では、教員による地域への視点に力点を置いた調査だったことを踏まえ、その続編であるKriffinら(2020)の報告をもとに、教員だけが牽引しないサービス・ラーニングが展開されるための知恵を求めることにした。TRES1とTRES2は、調査票の設計と表現を比較しただけでも、互いの趣向の差異を見てとることができる。筆者の関心に即して表現するなら、TRES1は研究者らの「わかりたい」という思いが、TRES2は研究者らの「よくしたい」という思いが、それぞれ反映したものではなかろうか。もちろん、両者に優劣はなく、TRES1ではいかにして大学が地域に貢献できるかを可視化・数値化できるかに向き合った成果であり、TRES2では教員のみならずSOFARで示されるサービス・ラーニングの5種類の構成員が自らの振る舞いそのものだけでなく関係者間での相互作用の有無とその動態についての省察を促すものとして仕上げられている。

調査票としての趣向が異なるとしても、TRESは1も2も「現状」と「理想像」との相互比較をするという共通点があることは、サービス・ラーニングが大学側の、また学生側で自己完結した思考と実践に留まってはならないことに改めて注意を向けてくれる。折しも、2023年1月15日に3年ぶりで対面にて開催された立命館大学のサービス・ラーニングによる正課科目「シチズンシップ・スタディーズ」の活動報告会の際、その資料集として配布される中に「自己完結せず、満足しつつ、地域に貢献を」と題した小文を収めさせていただいた。自主性・自発性が求められるからこそ、時に受講生たちは現場から求められる「すべき」ことと、自分たちが「やりたい」ことの双方を実現しようと試みる。しかし、「やりたい」ことを優先してしまうと「すべき」ことが軽視され、一方で「やりたい」ことが「やり遂げよう」とするときにはそれがチームのメンバーでの総意ではなく、一部のメンバーの思いが先行し「私たち」の活動にならないこともある。

立命館大学の「シチズンシップ・スタディーズ」では、現場でのオリエンテーションを経た事前学習で目標設定を行い、中間ふりかえりで目標の再設定を行い、事後学習で目標に対する相互評価を行うことで、活動が自己完結しないように促している。現場の方々は受講生の意思決定を尊重いただけるため、受講生の思いを最大限に尊重しつつ、その姿勢や態度を寛大に受け止めていただけるものの、使命感や責任感が強い受講生ほど、思い入れが思い込みとなる場合がある。そこで筆者は「皆さんはそれでいいとしても、それが何になるのか」と介入することがある。そのとき、一部の受講生からは議論や活動が止められたことへの不快感を「こんなにがんばっているのに」と言わんばかりの表情で示されることがある。

ここに、冒頭で示した「解決をめざすと続かない」という現場と、地域社会と共に「何をめざして取り組むのか」を結ぶ上で，少なくとも大学の教育実践を展開する上でのヒントがあるのではなかろうか。それは学生が「すべき」ことと「したい」ことと「できる」ことを結ぶ、ということである。学生の現場への関わりは単年度、セメスター単位かもしれないが、大学と地域との関わりは交流的から変容的へと、継続的かつ発展的に展開することも可能である。そこには日常生活を送る住民の存在も、学生の活動環境を整える大学の執行部や事務局の役割も不可欠であり、そうしたパートナーシップのよ

りよい形を探るためにも、次回はTRES1とTRES2との相互比較を通じて得られた知見を紹介し、サービス・ラーニングにまつわる構成員が地域やプログラムのあり方について共通認識を抱き、よりよい地域へと導くための集団意思決定の大切さを確認することとしたい。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

Ash, S. L., and Clayton, P. H. 2009. Learning through Critical Reflection: A Tutorial for Students in Service-Learning (Instructor Version). Raleigh, NC. PHC Ventures.

Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.

Bringle, R. G., & Clayton, P. H. 2013. Conceptual frameworks for partnerships in service learning. In P. H. Clayton, R. G. Bringle, & J. A. Hatcher (Eds.), Research on service learning: Conceptual frameworks and assessment (Vol. 2B: Communities, institutions, and partnerships, pp. 539–571). Stylus.

Clayton, P. H. Bringle, R. G., Senor, B., Huq, J., Morrison, M. 2010. Differentiating and Assessing Relationships in Service-Learning and Civic Engagement: Exploitative, Transactional, or Transformational. Michigan Journal of Community Service Learning. Michigan Journal of Community Service Learning, 16, 5-22.

Kelley, H. H., & Thibaut, J.W. (1978). Interpersonal relationships: A theory of interdependence. Wiley-Interscience.

Kniffin, L., Camo-Biogradlija, J., Price, M. F., Kohl, E., Williams, J., Del Conte Dickovick, A., Goodwin, A., Johnson, K. V., Clayton, P. H., & Bringle, R. G. (2020). Relationships and partnerships in community– campus engagement: Evolving inquiry and practice. International Journal of Research on Service- Learning and Community Engagement, 8(1), Article 15.

【注】

[1] 本連載では第20回の初出時を含み、第22回・第23回でもTRES（Transformational Relationship Evaluation Scale）の訳を「変革的関係評価尺度」としていたが、今回のKniffinら(2020)の解題を通じて、改めてE-T-T連続体との関連づけが確認できたため、以後「変容的関係評価尺度」と訳出して使用していく。

[2] なお、Kniffinら(2020)では、こうしてBringleら(2009)の論文の要約や簡略化に加えて、新たな語用も提示している。実際、SOFARにおいてステイクホルダー間の3者間以上の関係性を取り扱うときにrelationshipやpartnershipでもなくnetworkという表現を用いる（we have chosen to reserve the term network for those relationships that are more extensive than a triad）」を示している。なお、SOFARモデルは、当初のBringleら(2009)はもとより、TRESを紹介したClaytonら(2010)でも、さらには専門書に収められたBringleとClayton(2013)でも、S-A-R-O-Fの順であったが、Kniffinら(2020)ではS-O-F-A-Rの順で配置されている。

[3] 第20回の注1では、AshとClayton(2009)において示された地域（コミュニティ）に対する大学（キャンパス）の構成員を「教員と学生」に分けた3者関係を、Bringleら(2009)では大学を「管理者、教員、学生に区別すること」と地域を「組織」と「住民」に分けられた背景について、原文を引用して示した。ただ、Kniffinら(2020)では、BringleとHatcher(2002)にて、後に「正式にSOFARモデルとされる（to formalize the SOFAR model）」5つの構成員について「明示した（clarified）」と述べている（p.5）。具体的には「キャンパスとコミュニティのパートナーシップは、キャンパススタッフ、教員、学生、地域に根ざした組織のスタッフ、住民自治組織の利用者や多様なコミュニティを持つ住民ら、これらによって形成される社会的ネットワークを形成する複数の二項関係を伴う（campus-community partnerships involve multiple dyadic relationships that create social networks of campus staff, faculty, students, staff from community based organizations, clients of community-based organizations, and residents of various communities）」（p.513）とある。

[4] transactionalは「取引的」と訳出するのが自然かもしれないが、サービス・ラーニングのパートナーシップでは親密性・公平性・誠実性の3つの特徴が反映するものという観点から「交流的」としている。ただし、これは本連載第10回で紹介した、ミネソタ大学のアンドリュー・フルコ先生が2019年7月27日に立命館大学での講演時、筆者が日本語を併記する際からの一貫した工夫である。その際にはサービス（活動）とラーニング（学習）とのあいだでの双方向の矢印の太さに着目し、連載第8回のタイトルにも掲げた「中道を行く（balanced approach）」という観点からの工夫であった。なお、フルコ先生の講演内容に基づいたパートナーシップに関する議論は第12回にて紹介したので、改めて参照されたい。

[5] ちなみにBringleら(2009)では、「人間関係の相互依存性理論」について、社会心理学者のハロルド・H・ケリーとジョン・W・シボーによる研究（Kelley & Thibaut, 1978）を筆頭に挙げている。なお、表2として訳出したとおり、結果として、TRESの5段階評価の平均値は、交流頻度が低いほど、相互作用の多様性が低いほど、そして相手の意思決定に貢献する関与が低いほど、有意に低かったことが明らかとされた。この結果を反転すれば、高い頻度で交流し、多様な形態での相互作用がもたらされ、大学側からも地域側からも互いの意思決定に積極的に関与し貢献していくことが、変容的関係への発展と維持がもたらされうることがわかる。

[6] Kniffinら(2020)では、TRESの簡略版を未公刊の資料として「Clayton, P. H., Janke, E. M., Hess, G., & Bringle, R. G. (2009). Transformational Relationship Evaluation Scale, II [Unpublished document]. PHC Ventures.」と紹介している。